◎開会

○委員長 皆さん、おはようございます。お集まりいただきましてありがとうございます。ただいまから第2回武蔵野市いじめ問題対策等委員会を開きたいと思っております。

◎教育委員会あいさつ

○委員長 初めに教育委員会から、真柳教育部長にお話をいただきたいと思っております。よろしくお願いいたします。

○真柳教育部長 皆様、おはようございます。冒頭少しお時間いただきましてご挨拶させていただきたいと思っております。

本日は大変寒い中、大寒波が来ているということで、今週ずっと寒いようがございますけれども、いじめ対策委員会のほうにご参加いただきましてどうもありがとうございます。

今年度第2回目の対策委員会ということになるかと思います。言うまでもなく、この委員会は市のいじめ防止等のための対策を実効的に推進するための委員会ということで位置づけがされているものでございます。我々大人の世界でさえ、やはりいじめというものは存在しているのだと思っております。ましてや子どもの世界においてはそうなんだろうということがございますが、そのために、じゃ、何ができるのかというのを考えていくのが我々大人の役割なんだろうと思っております。

今回はいじめ防止の取組、今年度どんなことをしたのかということをご報告もさせていただきます。それを踏まえて、また来年度以降はどんなことができるのかということをお知恵を拝借して考えていければと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

○委員長 ありがとうございました。部長から、今、この委員会が何ができるのかということ、そういう話をいただきまして非常に私が思うには、今、お話にあったように、何ができるかといったときに、予防策はすごく重要なんだろうというふうに思っています。そういった意味で、先ほど事務局からも資料の確認がございましたけれども、資料ほぼ全てと言っていいぐらい、武蔵野市の子どもたちが安心して家庭生活あるいは学校生活が過ごせるような基本になる資料だと思うんです。そういうことで説明を聞きながら、我々委員会が何ができるのかとか、こんな点を家庭に

も、あるいは学校にも予防策としてお願いできればいいよということは議論できればいいなというふうに思っております。どうぞよろしく忌憚のないご審議をいただければというふうに思っております。よろしくお願いいたします。

◎報告事項

○委員長 それでは、議事に入りますけれども、統括指導主事から報告がございますということで、お願いいたします。

○高丸統括指導主事 では、私のほうからご報告をさせていただきます。

まず、本委員会の運営に関わるところで対策委員の任期についてでございます。皆様、今年度対策委員として就いていただいた方、あるいは昨年度から継続で就いていただいている方いらっしゃいますけれども、対策委員の任期は2年間ということになってございます。ですので、昨年度から継続していただいた方につきましては、今年度末で一度任期としては終わりということになります。また、今年度充て職ということでなられた方もいらっしゃるかというふうに認識しております。その方も本当に1年間ありがとうございました。

来年度以降のまた委員につきまして、任期は2年となっておりますけれども、来年度以降の委員につきましても、またお願いをさせていただく場合がございます。また、別の方をご推薦いただくという場合もあるかと思えます。どちらにしましても、その必要がある場合、本日以降に委員の皆様にもメール等でまたご相談をさせていただければというふうに思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

私からは以上でございます。

○委員長 何か皆さんからご質問とかご意見ございますでしょうか。よろしいでしょうか。2年ということで私自身もほっと荷を下ろしているところですが、いろいろまた皆さん、事務局から連絡ありましたらよろしくお願いしたいと思っています。もしなければ、次の議題に進みますけれども、よろしいでしょうか。

◎議事

○委員長 今日の議題に移りたいと思っております。

まず1点目は、武蔵野市におけるいじめの未然防止等の取組状況について、事務局から説明をお願いいたします。

○高丸統括指導主事 では、最初に私から概要を説明させていただきます。

今年度いじめ問題対策委員会を2回行うということで、前はこういった現状と

いうところとか昨年の取組ということをお伝えさせていただきました。本日は、本市における今年度のいじめの未然防止、こういったことを取り組みましたということにつきまして、指導主事から報告をさせていただきます。その後に議事の（２）に審議とございますけれども、また、皆様それぞれの立場から市の取組に対してご意見いただければと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

指導主事の奈良より説明をさせていただきます。

○奈良指導主事 では、こちら画面に沿って説明させていただきます。私から今年度のいじめの未然防止等の取組について報告いたします。

改めて、まずいじめの定義についてご説明いたします。いじめとは、児童等に対して当該児童が在席する学校に在籍している等、当該児童と一定の人間関係にある他の児童が行う心理的または物理的影響を与える行為であって、当該行為の対象となった児童等が心身の苦痛を感じているものという、いじめ防止対策推進法に示されています。

次に、武蔵野市のいじめの現状についてご説明いたします。令和３年度から５年度のいじめの認知件数の推移でございます。今年度の定例教育委員会で報告した令和３から５年武蔵野市の不登校・いじめ・暴力行為に関する実態についてを通じて、グラフのようにいじめの認知件数を把握しております。小学校、中学校ともに令和３年より減少の傾向にあることが分かります。令和５年度の学年別のいじめ件数ですが、小学校１年生が最も多く、学年が上がるにつれて件数が減っております。これは例年同様の傾向であり、小学校は低学年の児童が何でも打ち明けてくる傾向が多くなる傾向であり、中学校では大人に言わなくなる生徒もいることが影響していると考えられます。

続いて、いじめの様態についてご説明いたします。件数が多い様態として、小学校、中学校ともに冷やかしの嫌なことを言われるといった言葉によるいじめの行為が上げられます。小学校では仲間外れや集団による無視といったいじめも多く見られています。また、パソコンやスマートフォンを使って嫌なことをされる件数は小学校が７件、中学校が２件となっております。

こちらの表にはございませんが、配付した資料１の裏面④をご覧ください。④２番、令和４年と比較すると、冷やかしの嫌なことを言われる、からかい、悪口は令和４年が９７９件から７１１件と減少している一方で、仲間外れや集団による無視は令和４年の２２０件から令和５年は２４１件と増えております。

続いて、画面をご覧ください。こちらは平成３１年から令和５年度度の全国学力学

習状況調査、児童生徒質問紙における、いじめに関するアンケート結果でございます。いじめはどんな理由があってもいけないことだと思いますかという設問で、武蔵野市は全国、東京都平均と比較して、小学校、中学校ともに数ポイント低い結果でございます。これはほとんどの年度で見られるのが同様の傾向であります。

これらの現状を踏まえた上で、いじめ防止に関わる今年度の取組について、6月に行われた第1回にて報告した取組の経過や改訂された重大事態ガイドラインに関する事など6点ご説明させていただきます。

まず①、市いじめ防止基本方針ポスターについてです。武蔵野市いじめ防止基本方針が掲載されているこのポスターを年度当初に配布し、赤い上の四角ですが、で示したように、各クラスで話し合った具体的な取組を記入したものを教室に掲示しております。このポスターは下の黄色の丸で示してあるように、2学期以降にその取組を追加して記入し、継続的に活用できるものになってございます。

次に2、いじめ防止重点月間についてです。資料②をご覧ください。武蔵野市では9月をいじめ重点月間として定め、毎年作成したリーフレットを学校に配布しております。今年度は第1回のいじめ対策委員会で皆様の意見を踏まえ、保護者に対して早期発見、早期対応につながるように、いじめのサイン発見シートやいじめを見つけるための声かけフレーズを取り上げました。

また、裏面では昨年同様に、家庭でのSNSの使用ルールを掲載しております。

続いて3、ふれあい月間の取組についてです。東京都が定めているふれあい月間は6月、11月の2回でございますが、武蔵野市はさらに2月を加え、年に3回ふれあい月間を設定しております。各回、画面のようなふれあい月間アンケートを実施し、いじめの実態把握に努め、いじめを認知した場合には管理職が必要と判断した場合に、いじめ対策委員会を開催して対応を検討しております。

アンケートの項目は例えば、「あなたは今年度の4月から今までに友達とのことで嫌な思いをしたり、困ったりしてはいませんか」などがあります。今年度はこれまでにこのアンケートを受けて、学校から気になる書き込みなどの報告は特にありませんでした。

続いて、ふれあい月間学校シートの活用です。資料3をご覧ください。ふれあい月間学校シートは、各教員が日頃取り組んでいる自身のいじめ防止対策について学校全体で集約したものについてPDCAサイクルによる評価改善を行う内容となっております。その学校シートを活用し、学校いじめ防止基本方針の見直しにも活用しております。

こちらの資料は市内全校の学校シートを集約したものです。6月と11月の取組を比較して状況を把握することができます。レーダーチャートが大きく示しており、取組が充実していたものとしては、見づらくて申し訳ありませんが、赤の枠のところで示してある、児童生徒へのアンケートの実施・結果の共有についてやいじめは絶対に許さない行為であると指導したことについてでした。一方で、グラフがへこんでいるところですが、黄色枠で示した全教職員による保護者への基本方針の周知が課題として上がりました。この課題については、2月の生活指導主任会にて各学校にて周知していきます。

次に4、いじめ防止関係者連絡会についてです。資料4をご覧ください。いじめ等の未然防止や早期解決に向け、関係者が一堂に会し、具体的な対応策に関する協議を行い、全市的な行動連携を深めることを目的として開催しております。

7月に実施し、主な議題として、日頃から人を思いやる心の育成について、学校とPTAの協力、保護者からの連絡方法の仕方などが上がりました。

次に5、いじめの重大事態調査に関するガイドライン改訂の概要について説明いたします。資料5をご覧ください。このガイドラインは令和6年8月に改訂されました。概要の内容としては、児童生徒、保護者からの申立てがあった際の対応、事前説明の手順や説明事項の説明、調査すべき調査項目などを明確にしたことなどが示されています。

その次の資料になりますが、ガイドラインチェックリストがございます。また、重大事態に対する平時からの備えや調査の実施に当たり、基本的な項目について確認することができるようチェックリストがございます。このチェックリストを学校に送付し、研修等において活用するように伝えていきます。なお、現状の各学校が作成する学校いじめ防止基本方針については、このチェックリストの結果を踏まえ、方針が書かれたものを年度末に確認していく予定でございます。

最後に6、第四期武蔵野市学校教育計画におけるいじめの未然防止等に関する取組について説明をします。資料6をご覧ください。令和7年から始まる第四期学校教育計画には、方針の一つにある自らの人生を切り開く自信と意欲を育むことに向けて、まず未然防止の観点から、学校の風土を的確に把握し、安心できる学校、学級風土づくりをしっかりと行い、その土台の上でいじめ防止対策推進法などに基づく学校いじめ対策委員会による組織的ないじめ対策を着実に実施すると示しております。

以上で、私からの報告は終わりにさせていただきます。

○委員長 ありがとうございます。

膨大な中身で一気に頭に入らないところがあるかもしれませんが、非常に丁寧に説明をいただきました。また、質問があろうかと思しますので、皆さんからいろいろお受けしたいと思っていますけれども、今の事務局の資料の説明で、この点をもうちょっと詳しく話してほしいとか、質問があれば忌憚なく教えていただければありがたいんですけども、いかがでしょうか。

どうぞ、お願いします。

○委員 武蔵野市ではいじめはどんな理由があってもいけないことだと思いますというのがすごく、すごくでもないけれども、低いのには何か理由があるとかあるんですか。

○高丸統括指導主事 理由というところは、正直なところは分かりません。あくまで子どもたちがつけてきた数値というところでこういった結果になっています。

○委員 全員のやったというデータが。

○高丸統括指導主事 そうです。なので、子どもたちの理由というところまでは聞けてはいないので、あくまでこちらで推測をするしかないというところはあるかとは思っています。この現状については、学校とも毎年ここ最近下がってきているということもありましたので、共有はしておりますして、今年度令和6年度につきましては、少し上がっていたところになっていますので、学校のほうでそういった危機意識というんでしょうか、いじめは許されないことなんだということの意識というのが少し高くなっては、多少ですけども、学校のほうで指導していただいているというのはあるかなというふうに思います。

○委員 都内でほかの地域と比べたデータとかどこかで見れたりしますか。

○高丸統括指導主事 都内のほかの数字というところは、データではないです。

○委員 都とかに聞いたりしたら分かるかそういうのはあるんですか。

○荒井指導課長 東京都全体の数値というのは発表されているんですが、自治体ごとというのは発表されていないので、各自治体のこういった対策委員会の資料を取り寄せれば収集することは不可能ではないかもしれないんですけども、現状ではそういったことが何かどこかで一覧になっているということはないです。

○委員 分かりました。もし、可能だったらいつか分かるか、地域差とか何か独特のものがあるのか分かるかなと思って。

○委員長 今、ご指摘されたことは私も感じるところがありまして、実は参考までにですけども、今の話で東京都でも都全体の連絡協議会というのをやっているん

です。それに私も関わらせていただいていることがあるんですけども、その情報の中でもいわゆる高丸先生のよく分からないという話がありましたけれども、そのとおりで根拠はなかなかなさそうなんです、どうも。曖昧な言い方ですごく質問された委員からすると納得できないという感じがあると思うんです。それで、データそのものはあるんですけども、なかなかどんな理由があってもいじめは良くないというふうに思うことが、大体数字的に言うと94.7から96.5と2%前後でぶれているわけですけども、ここらあたりをどういうふうに意味づけるかというのはいろんな解釈があるんじゃないかという気はするんです。これは100%になればいいかという、そういう問題でもないかもしれない。そういう議論があって、今、ご説明がありましたように、なかなかこれに対して的確な答えが出てこないところがある。

参考までに申し上げますと、先ほども武蔵野市の教育プランの中にもありましたけれども、子どもたちが学びやすい学校風土をつくるという話がありました。スクールライメイトという学校風土をどうつくるかということがすごく重要で、やっぱり温かい雰囲気のある学校であれば、いじめというのは未然に防止しやすいところがある。ところが、それがなかなかいわゆる学級崩壊に陥ったり、学校がすごくつらい状況にあると、いじめが起きやすい、ストレスがたまりやすいという傾向があるようで、その都の連絡会議でもちょっと話題になるのは、いじめは特に重大事態とか、何かその一歩手前にあるような事態に陥るときという、地域はそう言ってはいけないんですけども、偏っている傾向があるという分析をされる方もいらっしゃるんです、同じところで起こっているんじゃないかと。

ですから、国のほうでも文科省が今回、重大事態を取り上げたケースというのが昨年10月でしたかね、発表のデータによると1,000件を超えていますよね、重大事態が。その前の年が九百何件かで、一気にぼんとまた1,500件ぐらい増えたんです。それを全部重大事態の報告書を文科省が集めて分析するという。それで返しますよということは言っているんですけども、どんな返し方するのか楽しみにしているんですけども、文科省も処理に困っているというのが現状じゃないかという、僕、乱暴な言い方で恐縮なんですけれども、そんなふうに思っていて、しゃべり過ぎてしまって申し訳なかったんですけども、そういう状況があって、いじめについて、いじめは良くないことというのは当然のことなんですけれども、どの程度認識されているかということについては、すごく難しい問題であるなという気はします。

お願いします。

○委員 先ほどの数値については、誰がどういうふうに答えて、それがどうしてかという、さらに調査はしていないんですけれども、ふだん嫌なことがあっていじめですという訴えがあったときに、学校ではその子に対して嫌なことをしたという子呼んで指導する場面があるんです。そこでその子がよく言うのは、「相手の子も嫌な思いをしているよ、いじめだよ」という話を担任がしたときに、子どもたちが「でも」と言うんです。「でも、あの子はいつもこうだよとか、僕は前にこういうことをされていたよ」って。それが別の言い方をすると、先ほど、どんな理由があってもということがあったと思うんです。そこについては子どもとしては、いじめはもちろんいけないということは分かっているんだけど、どんな理由があってもという点で言うと、腑に落ちない。自分だって嫌な気持ちをしているとか、我慢をしているというのは多分子どもなりにあるんだろうと思うんです。これ数値的に言うと、1ポイントか2ポイントぐらいですので、学年で1人か2人なんですね。そういういろんな過去の経験の中で、どんな理由があってもいけないとは思いついていけないという子がいる。もちろんそこは指導していかなくてはいけないんですけども、子どもの本音としてはやっぱりそういうものがあるんだろうというふうに学校としては感じています。これがいいというふうには思っていないけれども、実態としてはあるというふうに感じています。

○委員長 ある面で校長先生のお立場ということもあらわれて、学校の状況を詳しく教えていただきました。ありがとうございます。

それから今、ご指摘されたことは根本的な問題で、すごい大事な指摘をいただいたというふうに思っております。よろしいでしょうか。

今の件については、よろしいですか。

○委員 大丈夫です。

○委員長 ありがとうございます。非常に大事な指摘をいただきました。

ほかの委員の皆さん、今の資料等の説明で質問とか。

どうぞ、お願いします。

○委員 ご丁寧にご説明いただきましてありがとうございます。

1点、資料2で保護者の皆様へといういじめのサイン発見シートというのをお配りいただいたんですけれども、このシートは児童を介して配布しているだけであるのか、あるいはこれに基づいた何か学期始めとかに何か保護者会等々でお話をされているのかどうか、そのあたり取組のことを、もしお分かりになる範囲で教えていただければと思います。

○委員長 お願いいたします。

○高丸統括指導主事 我々のほうからはあくまで保護者の方々に渡していただくというところ。ただ、ただ渡すだけじゃなくて、子ども自身も見て、学校の中で話をしてもらって保護者に渡してもらおうというところで運用しております。ですので、それを保護者会で配っているとか、あるいは違う形というところを各学校で工夫されていらっしゃるかというところまではこちらでは特には集約はしておりません。もし、小学校のほうで何かあったら。

○委員 分かりました。

○委員 この時期にちょうど保護者会がある学校と、予定のない学校ってあるので、一律の対応ではないかなと思います。

○委員 ありがとうございます。

○委員長 これもやっぱり渡すだけじゃなくて、先生たち何か工夫してやっつけらっしゃると思うんです。またこれも余計なことなんですけれども、私も別な区のやつでこういうのを頂いたことがあって、学生に生徒指導論の授業の中で使ったことがあるんです。学生たち、こういう読んで、言葉で。当然教育委員会の人たちの先生にこれを学生に使わせてもらっていいかという許可を得た下でやったんですけれども、学生が読むと、当たり前、私たちもこれ通じるよねという話をよくいたします。そういう意味では、こういうまとまった言葉というのは、できればもちろん子どもの前で一緒に子どもと読んで学び合ったり確認し合ったり、できれば保護者会なんかで読んでみるといいと思うんです。親御さんにも大人に読んでもらおうと、すごくまた分かるんです。改めてこれすごく大事なまとめ方をされているので、すごくうれしく思っております。

ほかにはどうでしょうか。

お願いします。

○委員 私は民生委員を代表して参加させていただいているんですけれども、民生委員だけだと、狭い地域の状況とかそういうのしか把握できないんですけれども、防犯協会もやっつけまして、吉祥寺駅、境駅、三鷹駅ってそれぞれJRの駅が3つありまして、そのそれぞれの支部の活動というのがかなり差があると。青少協もそうですし、ボランティアの見守りをする人たちのカラーもそれぞれ違いまして、そういうのが例えば今全国平均、東京都平均、武蔵野の率といいますけれども、そういうのというのは地域で、これは先生、すみません、学校でもあるのかなという。その住んでる住民のカラーでそれぞれ意識というのはかなり私がそっちの団体で感

じるので、非常に地域のそこの小学校のOBといいますか卒業生のもう高齢の方が一生懸命やって、その人がリーダーでお母さんたち引き連れて子どもの見守りやるところもあれば、淡白に少ないボランティアでやるところもあるし、地域でかなり差があるので、そういうのがこのデータに何か反映しちゃうというケースがあるのか。それとも学校でここは意識が高かったとかそういう発表というのは非常に難しいんでしょうけれども、そういう要素というのも地域でいじめというのがあるのかなとは今感じています。

以上です。

○委員長 いい指摘。何かコメント、いいですか。

○高丸統括指導主事 ありがとうございます。

そうですね、地域差というところでの分析というところは確かにそこまで細かくしたことはないかなと。この地域の特色とかそういったところは我々も学校とのやり取りの中で感じているところは確かにあるところなんですけれども、それがいじめというところでどう影響があるかというのは1つ新しい視点かなというふうに思ったので、そういった地域ごとの数値の出方であるとか、保護者の方々の訴え等というところとかを絡め合わせながら今後ちょっと分析する視点の1つとしてやっていきたいかなというふうに聞きながら思ったところではございます。

ありがとうございます。

○委員長 どうぞ。

○委員 今のご意見で私ちょっとまた気づかされましたけれども、確かに全国と比べるというのも視点の1つだけれども、この武蔵野の中で結局あれ平均値なわけだから、やはり地域もあるし、学校での差もあったとしたら、この委員会はそういう差もちゃんと知っていて協議することはしていいと私は思うので、もう少しそういうことが、年度によって違ったりするかもしれないし、各校でのデータ、そういうこととは違って一貫性が何かあったりするのかもしれないことちょっと今後知っていけたら、より具体的な提案とか分析できるかなと思いました。

○高丸統括指導主事 そこはぜひ見ていただいて、この傾向はというところはお指摘いただくと我々としても今後の対策というところにつながるかなというふうに思いますので。今日はちょっとご用意できないんですけれども、次年度以降ですね。

○委員 ぜひ、次回で構いませんので。

○高丸統括指導主事 はい、出し方をちょっと工夫してやっていきたいと思います。

○委員長 そうですね、数値的には資料1で示していただいている、画面にあるその各学年ごとの内訳とかそういうのも、これは基本的には学校ごとのベースがあるはずなので、それも出していただくと、その学校の特色分かったりする。学校ごとにするといじめの多い学校は困るじゃないかという議論になるかもしれませんが、それはちょっと論外だと思うんですよね。そうじゃなくて、特色を知るという、ある意味では地域差ということもあって、やっぱりそれは大きく言っても言えることなので。本当に余計な情報ですけども、例えば23区内でも結構、これはあまりそういうふうな表現しちゃいけませんですかね、いわゆる親の年収とかそういうこととも関係があるんですね、やっぱり。そういうのを分析されている方もいらっしゃいます。やっぱり地域的にそういう親御さんのほうである程度高い教育意識あるいは資金を投じているところはささいなことでいじめられると深刻な事態にぐっと捉えて、大きな課題にするところもあります。それがいいか悪いかというのはほかの議論があると思うんですけども、やはりそのところは地域差というのは今おっしゃるような指摘というのはすごく大事だと思うんですね。

私は客観的に見ると武蔵野市は割といろいろな意味で生活レベルも安定していたり、教育の感覚も高い市民が多いと思います。そういったいろいろなデータでほかのデータで見てもそれは言えないことはないと思うんですね。それも考えた上で、もしあれば、学校ごとのデータというのがあると、ある意味で委員会の我々として、それぞれ専門の方いらっしゃいますので、客観的に見える視点が出てくるんじゃないかというふうに思って理解したところです。

もし事務局でよければそういうのを出していただくとありがたいということですね。

これはあれですかね、校長先生にお聞きして恐縮なんですけれども、一般論でいいと思うんですけども、そういうのを学校ごとに出したら学校困るというような理解なんですかね。

○委員 正直同じ学校でも学年によって違うんですね。ですから、ある年のデータをもってこの学校はこうだという見方をせずに、あくまでもこの年はこうだったということで見ればいいと思うんですが、校長先生によっては気にされるかなと思います。

○委員長 そうですよ。ありがとうございます。

ほかの委員の皆さん方、ご指摘。どうぞ、お願いします。

○委員 今の話とはちょっと異なるんですけども、やはり保護者の方への働きか

けが大事だと思うんですね。自分の子どもに何か起こったときに初めて驚いたり不安になったりとかということがあって、ふだんはあまり意識してないかもしれないなと思っています。人権擁護委員会で子どもの相談というのがあるんですが、そこには親御さんからの相談というのも結構多くて、日中の時間帯、夕方までなので、特に大人の方の相談も多く、やっぱりいざ自分の子どもに起こってからの反応というのがいろいろで、結構深刻になる例が多いので、ふだんから親御さんにも、これだけではなくいろいろ知っていただきたいなという気持ちはあります。

○委員長 なるほどね。ありがとうございます。私もときどき武蔵野市の広報を見たりとか市役所へ伺ったときに見ることあるんですけども、非常に丁寧にいろんな情報を地域に発信してますよね。そういうのはすごくレベル高いんじゃないかなというふうに思っています。今ご指摘の点、非常に大事な視点いただきました。

ほかの委員の皆さん、何かございますでしょうか。

では、私のほうから1点だけちょっと、資料1のところの裏のところ、先ほどの数値のことと関わるんですけども、いじめの②のところ、認知件数の推移があって、先ほど1年生が非常に多いという話がありました。これについてどんなふうに理解、全国的にはたしか全国の文科省の数値では2年生が一番多いんですよね、たしか。武蔵野市は1年生が多いというのも、ちょっとこれ数字的に見ても70件ぐらい多いので、2年生よりか、プラスになってるので、ちょっと特徴的なのかなと。幼稚園との接続がどうなっているのか、あるいは保育園との接続どうなっているか、そこらあたりがもし事務局のほうで知り得ている情報があれば教えていただきたいという点が1点です。

それからもう一つは、小学校の数値と明らかに差があるのは中学校なわけですね。ただ、中学校は1年生、2年生、3年生、それぞれ6件、3件、2件ということで極めて少ないわけですけども、ただ、事自体は僕は重大性は非常に高いんじゃないかという気はする。そういう意味で、こういうのをどんなふうに捉えるのかということなんですね。そこらあたり、事務局のほうで議論して学校とのやり取りがあったら、差し支えない範囲で教えてもらえばありがたいと思います。

○高丸統括指導主事 ありがとうございます。

本市の場合、まず1点目の小学校1年生が一番いじめの認知というところでは多いというのは確かにここ数年の傾向としてやはりあるかなというふうに思っております。これもちょっとなぜかと言われると、幾つかの要因があるかと思うので、確実にこれですということはお伝えしづらいんですけども、今委員長からありま

したスタートカリキュラムという観点からでは、令和5年度にですね、改訂版のスタートカリキュラムというのをつくりまして各校で進めているところでございます。このスタートカリキュラムにつきましては、小学校生活ってこんなのだよと教えるというよりも、幼稚園や保育園あるいはこども園でやってきたことを生かす、子どもたちの思いを大事にしてそれを聞いた上で、じゃこうしていこうかということをつなげていくというところを非常に大事にしたプログラムを各校でやっていただいているところではあります。

先ほどの委員長の話でいくなれば、そういった中で子どもが先生に、小学校1年生特にいろいろと話をしやすいというところがひょっとしたらこういったところの数値に出ているのかもしれませんが。今お話を聞きながらそういった分析ができるのかなというふうには1つ思ったところでございます。

中学校のほうの数の差ですけれども、この数値の差は我々としてもこれ学校とも共有はしております、毎回中学校にこの数値が上がってくるたびに本当にこの数でいいんでしょうかということの確認はしております。当然我々のほうで把握している具体的な事例、これはどうなんでしょうということを確認させていただいたりということもあります。

ただ、そういったところを通して、いじめについては先ほど指導主事からも話があったように、相手が嫌なことも思った、感じたというところでも認知件数は1というところ、これは中学校でも把握はしてもらっていますので、その上での数がこれだったというところで。この状況ですね、本当にこの数でいいのかというところは引き続き中学校に対して問題提起はしていく必要があるかなと我々も思っているところでございます。

○委員長 丁寧にありがとうございました。特に中学生については、発達とか理解の仕方がありますよね。中学生であればほぼ自己理解というか、自分というのは確立してくるので、それぐらいのことは自分で収められるよと、特に先生に訴えなくてもいいよというそういう成長発達があると思うんですよね。そういう意味では武蔵野市の生徒たち、中学生がある意味では精神的に非常に成熟した中学生生活を過ごしているという見方もしていいんじゃないかという気がするんですね、数字の少なさというのは単に、僕は深刻さということも捉えたいわけだけれども、その精神的な成熟さもすごくあるんじゃないかと理解していいんじゃないかというふうにも思うんですけれども、ちょっとそれは甘すぎるよという意見もあるかもしれませんね。

○高丸統括指導主事 加えさせていただきますと、一方で委員長が言っていたところの視点もあれば、本当に子どもが自分の中で抱え込んでしまっている状況、これは絶対に防がなくてはならないということがありますので、大人に対して子どもたちが相談できるというところの数値ということについても我々としてもかなり注目して見ているところではございます。

ちょっと今日数値としてはここにはないんですけれども、学校に対してこの数値が学校で子どもたちが相談しやすさというところはしっかりと受け止めて分析してやっていってくださいねということは、これと併せて指導しているところではございます。

○委員 ちょっと確認させていただきたいんですけれども。この調査は紙面で学校でやるんですって。いじめの、この資料1の裏に出ているこれの基となったのは。

○高丸統括指導主事 こちらは各学校でアンケート等が出てきたものを各学校が集約している形です。聞き取ったものの中には含まれます。

○委員 じゃ、もし不登校で学校に行っていなかったら、その子たちのデータはこのいじめの数には入っていないということですか。

○高丸統括指導主事 いえ、それは聞き取りとかも入っていますので。

○委員 それも入ってる。じゃ、網羅された数値であると。

○高丸統括指導主事 はい。

○委員 ありがとうございます。

○委員長 丁寧にありがとうございます。

どうぞ、お願いします。

○委員 中学生という関係で言うと、少し学校外での交友というのも恐らく広がってくる年齢ではないかと思うんですけれども、いじめの定義上も、同じ学校内である必要はなくて、特にSNSとかインターネットもありますので、学校外の関係でのいじめやトラブルというものも起こり得る年齢だと思うんですね。その学校の連携といいますか、こういう事案があったようだというそういう認知ができるような、お子さんがまずそういう訴えができる環境があるかどうか、ほかの学校の子からこういうことをされているんだとか、例えばアンケートであるとかの中で児童から情報が上がってくるそういう仕組みやシステムがあるのかどうか、ちょっと聞きたいなというふうに思ったんですけれども。

○高丸統括指導主事 学校間の連携というところかというと、教員間の連携というところでいくと、生活指導主任というのがあります。このいじめのこともそうですし、

様々な子どもたちの生活指導を担当している主任が年間6回集まって情報交換をしております。その中で自校のこういったトラブルがあったというところもそうですし、学校間でトラブルというところももし起きていたらそういったところの情報交換もしていますし、そういったことが起きないようにここをちょっと気をつけよう、特にこの時期はこういったこともそうしようということの話合いをしたりということをやっているというのがあります。

また、日常的には当然学校間で何かあったと、例えば子どもたちでLINEを使ったトラブルであるとか、学校外のイベントでトラブルがあった、そういったところは子どもたちからも学校のほうに報告があれば、すぐに学校間で連絡共有し合っ

て話をしたりということもしておりますし。学校によっては今もそういったイベントでそういったことが起きないように、時間外ですけれども、先生たちがそういうのの様子を見に行ったりということもされてらっしゃる学校もあつたりはするということではこちらでは認識はしております。

○委員 ありがとうございます。

○委員長 今の点はすごくSNSの発達とか塾の問題だとか、それから部活動も今度はほかの学校と一緒にやるような部活、もう武蔵野は進めてますかね、割と小規模になって成り立たない部活もあつたりして。そういう横の広がりというのはすごく今委員がご指摘のようにあるので、そこのところは十分いろんな連携をしながら注意したいところですよ。

大事な指摘でした。ありがとうございます。

それでは、皆さんから質問がもしあればまた後でおっしゃっていただければありがたいんですが。先ほども事務局からもご説明がありましたように、いろいろな検討したい協議について、審議についてに移りたいと思っているんですけども。先ほども話がありましたいじめの件数だとか、それから学校での風土の問題とか、保護者の問題だとか、基本方針の問題とか、そういうことをいろいろ皆さん専門の立場からいろいろお感じになると思いますので、大変恐縮なんですけれども、二、三分程度でこの協議で検討したいことだとか、あるいは提言したいことについて、忌憚なくおっしゃっていただければありがたいと思っておりますけれども、いかがでしょうか。

最初をお願いしても、いきなり申し訳ないですけども、調子の整ったときから発信していただいて。

○委員 新たな定義というところが、すみません、すぐに思いつかないところではあるんですが。先ほどの様々な先生方からのお話の中で、私たちカウンセラーとしてどんなことができるかなというところも考えてはいたんですけども。

この小学校1年生の件数が多いという話の中にはありましたが、私自身の経験として、各学校全てでやってるわけではないんですけども、まずは相談できるような大人に対しての信頼関係であったり、相談できるような環境づくりであったりというところでは、カウンセラーとして教育支援センターの相談員が各公立学校には週に1回勤務しておりますので。中には、私入学式にカウンセラーとして参加をさせていただきまして、そこで全入学される保護者さんと児童の方がいる前でこういうカウンセラーいますよというふうに顔を見せてご挨拶をさせていただいたことが何度かあります。それによって、その後後ほど入学して学校生活する中で、保護者からのご相談、これはいじめに限らないことですが、ご相談いただいたときに挨拶のときにお顔見ましたというふうに言っただけの方も中にはいらっしゃいましたので、我々カウンセラーの認知度を上げていくというんですかね、身近な存在として相談しやすいように、保護者含め、子どもたちも相談しやすいような形で少しずつ関わっていきなるといいかなというのと。

あとは、新年度に関しましては比較的カウンセラーの中での意識としては、1年生のところ、少し手厚く見ていこうというところがありまして、もちろんほかの学年をおろそかにするということではないんですけども、初めて学校に入って生活しているという状況で、いろんな初めて出会うことで困難を抱えるお子さんもいらっしゃいますので、授業の様子も含めて、あとは休み時間ですね、そういった時間も含めて、なるべく1年生の様子を初めは見る機会を増やす、意識の中での活動期間で少し関わる機会を増やすというような意識でやっているところが、ほかの相談員も含め多いのかなというふうに感じています。

ですので、そういう形で相談しやすい環境づくりや予防策というところで気がついたことは先生方と共有するとかという形で活動させていただいているなというところを、すみません、お話を伺いながら今予防策であったり対応策であったりというところではやれているところかなというふうに考えております。

すみません、ちょっと趣旨と外れるかもしれませんが、ありがとうございます。

○委員長 予防策という点で入学式に出たりとか授業を見たりとか保護者に話したりとか、非常に予防するのも大事な点ですよ、臨床的な点から今お話いただきました。ありがとうございました。

では、お願いします。

○委員 スクールソーシャルワーカーです。今予防策とか未然防止という話題になっていると思うんですが、私たちスクールソーシャルワーカーは武蔵野市では各中学校区に一人ずつ配置されておりまして、その中学校区の小学校も担当させていただいていますので、小学校のときの状況を中学校に入学するときに中学校側の先生にお伝えしたりすることによって、そういったことが起きないように、または小学校のときこういうことがありましたということで、中学校の先生にもより厚く見ていただくというような取組をしております。

いじめ認知件数が小学校で一学年100件超えのところから中学校では二桁あるいは一桁になっているというところなんですけれども、やっぱり小学校の文化と中学校の文化がとても違うのかなという感じがします。中学校では思春期に入り、自分が悩んでいることを恥ずかしくて言えないというような年齢になってくることもありますし、同調圧力もかなりあるのかなと思います。言ってしまったことによって自分がまたさらに傷ついてしまうかもというので遠慮してしまうようなこともあるかと思います。小学校のときと中学校のときでは、大きな精神的な変化も身体の変化もありますけれども、このいじめ認知件数の減少を見るとちょっと心配なところかなとは思っています。小学校のときの課題で、私たちが見えているものは中学校にもお伝えして予防していけたらいいと思っています。

○委員長 非常に大事な指摘、ありがとうございます。今ちょっと私も話させていただければありがたいんですが。お話を聞きながら、小と中の文化が違うという話、それ大事な指摘で。実は私教員養成の仕事をしていまして、小学校の先生の場合は免許法上小学校全科なんですね。子どもを全部見るという発想です。中学校の先生はやっぱり教科の先生なんですね。教科の発想から生徒を見る目と、小学校みたいに人間全体として見る目、見る目が違う気がする。そういう意味では、中学校の先生たちに聞くと、先生たちの話を聞くと、やっぱり教科の発想で議論が進むんですね。ですから、小学校の先生は全体を見るという、言ってみれば学級経営とか先生のありようというのを丸ごと見るというところがあって、文化の違いというのは改めて大事な点だったなというふうに理解して、今教えていただきました。ありがとうございます。

では、よろしくお願いします。

○委員 あまり建設的なことがお話しできないんですけれども。小学校でうちの孫もその小学校へ行ってて、嫁からお父さんこうこうこうでなんていって、本当に

嫌なこと言われたとかそういうレベルがいじめとして計上されているという部分がすごい多いんじゃないかと思うんですね。

中学校に学校訪問行くと、生活指導の先生にいじめないんですかと言ったら、SNS上でちょっと嫌なことを言われたと、ちょっと面と向かって嫌なことを言うのと、そういうところで嫌なこと言うのとかなり質が小学校と中学校で変わってくるので、中学校は要注意だろうなど。

今日日本経済新聞に、どうしても闇バイトが興味いっぱいありまして、別の団体の。どうやってSNSとか闇バイトのそういうアプリも含めてやるかというので、タカイチという総裁に、自民党の何かそういう情報のやってるらしいので、もう制限をかけろ、警視庁の元総監がもっともっとそういうのをかけろというので、そういう力も必要ですし。

またちょっと警察絡みの話になるんですけども、昔警察不祥事というのがあって、警察の刷新するというので警察協議会というのをつくって、各警察署にその団体つくって、それぞれ市民としての意見を言い合えと、任期4年でやるんですけども、それをある記者が本にして、それを読んだんですね。それがあってから全国の犯罪の認知件数というのは半減して、ずっとコロナの前までずっと下降線だったんですよ。それというのは何と云ったら、やはり市民の目、私防犯協会ですけども、そういうのの目というのを強く残す、市民が意識するというのが、私は民生委員という立場もありますし、大人がもっと防止にもっともっと関わっていいのかなという。具体的にならずにすみません。大人がもっともっと人ごとじゃなく、そこら辺にいじめがあるんだよと、このかわいい子ももしかしたらいじめっ子になるかもしれないよという気持ちで、疑うんじゃないかと、そうならないようにいい子でいようね、いい大人になりましょうよという環境をつくれたらいいのかなと。そういうのがさっき言ったある地区では一生懸命そうやってると。ある地区では人ごと、よその子は人ごと、こっちは自分と地域で育ててる子という、そういう少しずつ差が武蔵野の中でもあるんでしょうから、全体で高めていくというのが必要かなと。

すみません、具体的に何も言えずに申し訳ないです。

○委員長　すごくいいお話いただきまして、ありがとうございます。私も今日経新聞で見てたんですけども、そうですね、闇バイトって今私学生たちと関わってるもんですから、学生たちもそういう場面に遭遇しているのもいるんですね、やっぱり、聞いてみると。

○委員　最低13歳いますね。闇バイトで出し子か何か、受け子か何かになった、13

歳です、中学生。そこが犯罪に関わる子どもというのは、いじめとは直接関係ないでしょうけれども、何かそういう可能性も秘めた子になっちゃうんじゃないかと思えますね。

○委員長 この大事な指摘、すごく身にしみて分かりましたが。ありがとうございます。

では、お願いいたします。

○委員 前回も同じようなお話をさせていただいたかもしれませんが、児童等が心身の苦痛を感じているものがいじめという、この定義はすごく大切で、その心身の苦痛を感じているものを取り除かなくちゃいけないということはもう当然だなというふうに思うんですが、かなり幅があるわけですよね、その苦痛には。本当に軽いものから重篤なものまであって、先ほどのアンケートで1年生がすごくいじめが多い、認知件数が多いというのは、当然教員がふだん子どもたちを見ていて発見するいじめもあるし、それから子どもや保護者から訴えがあって気がつくいじめもあるんだけど、アンケートの中で苦痛を感じているという訴えがあって、改めて確認するという、そういう件数も多いもんですから、当然1年生はいろんなことを率直に書いてくるので、どうしても多いという部分があるのかなと思うんです。

それで、苦痛を感じているというものに、その重さにもすごく幅があるのと同時に、苦痛を与えている側の子からすると、意図的にしているのは当然駄目なんですけれども、そうじゃなくて、例えばその子の特性のようなもので、例えば大きな声を出してしまうようなお子さんがいたときに、お隣の席の子が苦痛を感じているようなそういうものもあるし、あるいはその子にとってはいろいろそれまでの育ちの中で当たり前で育ってきたんだけど、別の環境で育ってきた子からするとちょっと我慢ができないというものもあって、結局いろんなものがあるわけなんです。それを今いじめという言葉でくくってしまったがために、保護者の方からすると我が子がいじめられているということになってしまう。

私も子どもがいましたのでそうなんですけれども、自分の子が被害者になることはすごく恐れていますけれども、まさか加害者になるなんていうことは考えてないんです。でも、さっきお話ししたように、その子の特性で誰かに嫌な思いをさせているかもしれないし、その子の習慣で何か意図的じゃなくて嫌な思いをさせているかもしれないから、当然誰でも加害者になり得るわけなんです。だから、昔我々が小さかった頃のいじめとは今は違うということであるとか、さっきお話しされたように、やはり自分の子だけじゃなくて、周りの子とか、自分の子は被害者じゃなく

て加害者になる可能性もあるとか、そういう子どもたちを見守るといような目で見ていかないと、本当に小さな子ども同士のことまるで何か大事件のようになってしまって、結局子ども同士が傷ついてしまう、いじめじゃないところで傷ついてしまうといようなことも今起きかねないところなのです。

現代のいじめについての理解というのを、学校がもちろんしっかりやらなくちゃいけないところもありますけれども、保護者や地域の方にもしっかりそこは分かっていたら、地域として子どもが安全で安心の中で成長できるような、そういう武蔵野市になっていかなければいけないなというふうに感じています。

○委員長 ありがとうございます。

学校でのいじめの基本的な定義に振り返って現場のお話もしていただきました。ありがとうございます。

じゃ、お願いします。

○委員 私、子どもの診療をしているので、ここ10年とか15年すごい不登校を訴えとして受診される人がめっちゃくちゃ増えているというのを実感したんですけれども、いじめと不登校のデータ出していただいているけれども、先生がおっしゃったように同じことでもほとんど9割の子は平気なことでも1割の子にはちょっとつらかったり、あるいは、こんなひどいことをされているのにいじめられていると感じないという子も、逆の極端なほうにはいたりして、子どもそれぞれの特性だとか、あと家庭環境、バックグラウンドだとか、それまでの育ってきた教育環境でいろいろ修飾されるんですよ。

だから、教師とか大人が見て、これはいじめであるとかないとか判断するのは結構難しい。小っちゃなことだけれども、この子はめっちゃくちゃ苦しんでいる状態もあるので、そうすると、じゃ、どうしていくかなんだけれども、つらいと思っている子たちに気づいて、そして、カウンセリングとかソーシャルワーカーの立場からも、あるいは、先生としてその子たちに手を差し伸べてあげることすごく大事で、いや、このぐらいは軽いんだからね、君そんなに気にし過ぎちゃいけないよと言っちゃったら、その子ができることは不登校というところについて自分を守ること。それも親がそれを許容してればいいけれども、親はでも不登校駄目よ、行きなさいと言うと、その子はもっと傷ついてしまうわけなので、誰が何に何をしたかということだけではなく、その子がどう受け止めたとかいうこと。そして、ささいなことでも周りの大人がこの子に指導してあげること、過敏と言われるかもしれないけれども、子は生きやすくなるので、学校で生きやすくなるスペースへの援助がもつ

と増えたほうがいいなと思います。

いじめ、ひどいのもそれほどじゃないのも含めて苦しんでいる子たちへのケアがしたいし、不登校というところに、安全地帯に入るのはいいけれども、それはそれで成長の機会と、傷が癒えていく機会も失っていることになるので、なるべく不登校という最終手段で子どもを守るんじゃない、手前のところで、こういうところで、私たちがしっかり考えてやっていけたらいいなと私は思います。

○委員長 非常に大事なお話いただきまして、ありがとうございます。ありがとうございます。

じゃ、お願いいたします。

○委員 今、おっしゃったのは本当におっしゃるとおりだなと思って伺っておりました。

私から2点なんですけれども、1点目は、今回、重大事態調査ガイドラインが改訂されたということもありますし、あとは、それ以前から基本指針というものが出ていますので、そうしたものをやっぱり先生方の研修等を通して、まず大前提として理解を深めていくことが必要なのだろうということは、まず1点目として思っております。もちろん既に現場の先生方が一番苦勞されて、本当日々いろいろ取り組んでいただいているかと思うんですけれども、そこをいま一度確認をしていただきたいなというところが1点でございます。

もう一点目が、先ほどの冒頭でのご説明にありましたけれども、保護者の方への基本方針の周知というところの数値が少し低いというお話があったかと思えます。学校の先生方と保護者の方とか、あるいは、保護者と子どもとの間の認識が、もしかして違うんじゃないかと思うようなことも多くあるような気はしております、やはりいろいろな機会を捉えて保護者の方にも、今のいじめというものはこういうふうな捉え方になっているんですよということを、まず広い概念として捉えられているんですよということの周知は必要かと思えます。

それは早期の、以前からも申し上げておりますけれども、早い段階から芽を摘もうというところの趣旨でそうなっているんですよというところも、説明というか認識を共有していただいた方が良くかと思えます。実際、そうした事象が発生すれば、当然、学校としても適切に対応していただく必要があるんですけれども、他方で、先ほどもお話がありましたけれども、被害者の保護者だけではなくて、自分の子どもは加害者だというふうなことを言われた保護者とする、やはりそれに対して大きなダメージというように感じることもあると思うんです。ただ、それはやはりい

じめというものの概念やイメージが今と以前のものとは違うというところがあるので、今申し上げたような、広い概念なんだという認識をまずは共有することが必要かと思います。

他方で、基本指針等でも、状況に応じて、いじめという言葉を使わない指導、いじめという言葉を使わずとも使う必要はないんだということも書かれています。もちろん学校では実際に状況に応じた指導をされていると思うんですけども、いじめという言葉を使うことによって大ごとになり過ぎてしまう可能性というのもあると思います。なので、先ほど先生からありましたけれども、誰にでも加害・被害ということがあり得るんだという前提で、あくまでお子様の、子どもの尊厳とか、あるいは、子どもの健全な成長ということのためにいじめに取り組むんだという、そういう認識を保護者の方とも持って、学校の先生方とも協力して事案の対処に当たっていただけるような、そういう環境を整えられないかなというふうに思っています。

そのためにも、やはり保護者の周知が足りない可能性があるというのであれば、今のような趣旨を、もちろん納得いただけない保護者の方もいらっしゃると思いますけれども、こういう形で今のいじめというのは捉え方をして、子どものために皆さんで協力していこうという姿勢で取り組んでいるんですよということは、やっぱり折に触れて伝えていただきたいかなというふうに思っています。

すみません、あまり提言ということではないんですけども、私の今思っているところです。

○委員長 ありがとうございます。

ガイドラインの改正のことについても触れていただきましたし、また、これを確認したいというお話もございました。

それから、2つ目にお話しされた保護者の認識の仕方ですね。これやっぱりすごく保護者の価値観もあったりして、今おっしゃったように、我が子が加害者になる、被害者になると考えたときに、やっぱり認識が全然がらりと変わるんですね。私もちょっと幾つか経験させていただきましたけれども、やっぱり保護者にとってはいじめられるということについてとてもつらい思いをするし、その部分というのがすごく難しいなというふうに思います。

今ちょっとお話を伺いながら、ふと私、思い出したことがあって、余計なことですけども、平成6年ですね。皆さんもご記憶あると思うんですけども、平成6年11月だと思うんですが、愛知県の東部中でいじめ自殺をした大河内清輝君の事件というのがございました。

あれが非常にスクールカウンセラーの制度ができる発端になったことなんですけれども、そのときの昔の会議のときにたまたま私はそこへ参加させていただいたんですけれども、そのとき、精神科のお医者さんで浜松医科大学の精神科の先生がおっしゃって、やっぱり学校という文化の中に教育という場の中に、先生に子どもの内面を見るということはすごい難しいですよ。やっぱりスクールカウンセラー、専門家の人や精神科のお医者さんがきちっと関わるシステムが大事ですということ、を文部省に強く提言されたんですね。

それで、スクールカウンセラーの制度ができたというふうに思って、平成6年11月、たしか27日だと思うんですけれども、そのときにそういう事件が発生して、12月末にはその対策委員会が開かれたんですね。最初に。そのときにその会議の中でスクールカウンセラー制度を取り入れる、あるいは、臨床心理士、それから、精神科のお医者さんの専門家が学校にうんと関わるということが提言されました。やっぱり当時、文部省は、そういつてはあれですけれども、お金があったんですよ、多分。すぐ制度を取り入れて、7月には全国154校に臨床心理士を置きました。その制度が予算も組まれて、それすごく迅速な対応だったというのを覚えています。

それが今ずっと来ていて、東京あるいは武蔵野市も各学校にスクールカウンセラーの先生とか、その後にスクールソーシャルワーカーの先生とか配置されるようになったんですね。そういう経緯を今ちょっと思い出したんですけども、そういう動きの中で保護者がやっぱりかなりいじめの問題というのは深刻に受け止めるようになったというか、大事だというふうに認識したというのがある気がいたします。

そのときに、その後ですけれども、平成8年に発表がありましたけれども、文部省がそのケースを元にして、保護者1万人、児童生徒1万人、通称2万人調査というのをやりました。それも報告書がまとまっているんですけれども、その中で一つ象徴的なのは、やっぱりいじめをされた経験のある子ども、被害のある子どもが逆転して加害に移るというケースが半分なんですね。これやっぱりいじめの持つ問題の難しさを表している気がしていて、加害者、被害者という理解するのに非常に大事な僕は数値じゃないかなというふうに思っています。

そこらあたり、どういうメカニズムが働いているかというのを、先ほどお話を聞きながら強く思ったところで、やっぱりいじめの被害に遭う、加害になることがどんな気持ちになっているかというのは、どういうふうに認識するのか。そうすると難しいなというふうに思って理解いたしました。

そういう議論をやっぱり専門的な議論というか、そういうのを各学校でも十分深

める必要があるなというふうになんかちょっと思った次第です。

ちょっとすみません、お二人の先生の話から余計なことを思い出したんですけれども、お話しさせていただきました。すみません。

じゃ、お待たせして、お願いいたします。

○委員 そうですね、今、皆さんのお話を聞いて本当に同感することばかりで、問題点として挙げていただいた点は私も感じていたところですよ。

やはりいじめが大きくなってしまってからでは、本当に皆さんの生活が変わって苦しくなるということが起こっています。ですので、いじめの定義の範囲が広がっているというお話ですけれども、いじめと思えないことでも、最初の段階で何とかうまく対応できたらいいなと本当に思っています。

それに際しては、調査とか先生がきめ細かく見ていただくというのも本当に第一段階として必要だと思うんですけれども、やっぱり新しい制度ということで、スクールカウンセラーだとか、教育支援センター、社会福祉士さんの対応ということが始まっているのはすごくいいことだと思うんですね。今1週間に一遍程度というお話を聞いたんですけれども、入学式で自己紹介していただいて知っていただくというのもすごく大事で、回数ができれば今の2倍、少なくとも2日ぐらいになればいいかなと。そして、顔見知りなる中で、先生にも言えないけれども、親にも言えない子の場合でも、どこか様子が変わって、どうなのみたいな感じで気がついて、専門家の立場で何か言っていただけたら、子どもにはもちろん学校にもいいのかなと思いますし、初めの段階でうまく対応をすることが本当に大切だなと思います。対策の一つとして、カウンセラーさんたちの対応が増えればいいなと思いました。

○委員長 ありがとうございます。

今、初期対応の大切さを教えていただきました。特にカウンセラーの先生とか、ソーシャルワーカーの先生でもって臨床的な知見というのはすごく大事で、私も教育の仕事をしていると、いじめの予防で、やはり低学年は先ほどのように特にからかいかとか告げ口みたいなこと多いわけなんですけれども、そのときに先生がちょっと一言、呼吸を置いて、うん、どうしたのかな、もうちょっと教えてくれるとか、あなた、こういうことがあったのねというようなことが、ちょっとそういう言葉で対応したときと、何言ってんの、あなたという言い方をしたり、先生、今忙しいんだからとか、そういうことは全く真逆になるわけですよ。

何でこんなことを申し上げたかということ、やっぱり初期対応というときに、うん、困ったねとか、そういう一言があったらうんと違うんですね。幾つか重大事態の調

査とかちょっと大きな調査になって、初期対応はどうだったんだろうということ現場の先生と話したりする、あるいは、被害に遭った、あるいは加害になった子どもの聞き取り調査をしていると、そういう初期対応がやっぱりすっぱり抜けていることが多い。

それがやっぱりちょっと先生が一言目を向けて言ったり、一歩その子と例えば3メートル距離があったらそれを2メートルぐらい近づいてみた、そういう行為をしたときとしないときと違いですね。そういうのはやっぱり、先生方も大変なんでしょうけども、ちょっと一つ心がけてもらおうとありがたいし、保護者も当然だと思います。保護者もやっぱりそのこのところをやっていただけると、すごく重要な意味があるなと思って、今、話を伺ったところで余計なコメント申し上げて大変失礼だったんですけれども。ありがとうございます。

私のほう2点だけですね。いろいろしゃべったのでもう2点だけにしますが、1点目は予防とかということに関して、私のやっている範囲でいうと、やっぱり授業の充実なんですね。やっぱり学校というのは小中学校とも授業が分かること。授業時45分、50分の授業の中で学べてうれしいという、自分が主役になれる場面をいかにつくるかということがすごく重要で、これを実はいじめ防止対策推進法の中の3条の中に3つポイントが書いてあるんですけども、あの中にやっぱり子どもが安心して学校生活すると書いてあるわけですよ。そういうところを、1条の目的とか、2の定義もそうなんだけれども、3条のところすごく重要だなと思っていて、基本理念の3つを改めて大事にしたいし、先生方とやっぱり授業を大事にする。そういうことを一つポイントかなというふうに思います。

それからもう一つは、先ほどちょっと申し上げたかったんですけども、いじめの数値と、実は先ほどご指摘をされましたけれども、不登校の問題で、不登校の数値が大変率直に言うと数値だけ見ると、先ほど配っていただいた資料の中でも、不登校の数値が武蔵野市はこの5年間、平成30年から令和4年間の5年間で、ほぼ大体2.5倍になっているんですね。不登校が。これはちょっとやっぱり率直に申し上げて教育委員会も学校もきちっと分析してほしいというふうに思います。

やっぱりこれは何らかの子どもたちがストレスを抱えていたり、不登校という枠組みで自分の安全基地をそこへ求めるという。それはもご指摘されたように、やっぱりそこに安全基地を求めるのがいいのかもしれないけれども、リスクもすごく多いわけですよ。学びの機会を失ってしまうということがあるので、やっぱりそのところのこの数値ってどういうふうに考えるのか。これは全国的な数値でもある

んですけれども、やっぱり武蔵野市の文化的に高い風土にあってこの数値というのは何となくうなずける面もあるんだけれども、すごくある意味で、武蔵野市の学校教育の危機の一つというふうに捉えてもいいなというふうにちょっと思って、率直に申し上げて申し訳ないんですけれども、それをちょっと痛感したところです。

そういう点で、今日、事務局からいただいた資料、また我々の議論を大事に関係者の武蔵野市民全員が受け止めてもらおうとありがたいなというふうに思っています。

どうぞ、お願いします。

○委員 すみません、今、各小学校、中学校もチャレンジルームというんですけれども、不登校の子が学校に入ってきたけれども教室に行けない子、別室指導。それというのは数字入っているんですか。完全に学校に出てこない子なんですか。

○高丸統括指導主事 これチャレンジルームの子たちは出席の扱いになっているので、数には入っていないです。

○委員 ということは、実際、先生言うように増えているんですね。

○高丸統括指導主事 そうですね。

○委員 ちょっとその確認で、結構小学校もチャレンジルームって、不登校の子をできるだけ学校に通わせようというので、たしか全校もうやっていらっしゃいますよね。二、三年前から。充実しているんで、そこに非常に神経使っているんで、そういう対策は取っていらっしゃるんですけれども、それがここに数字に入っていたのかというのをちょっと私も確認したかったの。

○委員長 ありがとうございます。

どうぞ、荒井先生。

○荒井指導課長 確かにチャレンジルームの場合、一旦不登校になってカウントされた子がチャレンジルームに通い始めて学級復帰したとしても、数字としては残ってしまうところがあるので、今、のご指摘を受けて、だとすると今後、復帰率というか、一旦不登校にはなったけれども、人間関係をつないで、それこそおっしゃったように、顔見知りになっていくうちに少し学校に通えるようになった子とか、そういう子がいるのかいないのかの分析も必要なんだなというふうに思います。

そちらはちょっとこちらの数値で出ていなかったの、来年度以降の課題として持ち帰りたいなと思っています。

○委員 すみません、今ちょっと分からなくなったので。ここに書いてある不登校の合計の数には、チャレンジルームに行っている子は入っていないんですか、いるんですか。

○荒井指導課長 両方あります。30日以上欠席をした段階で数字として入ります。

○委員 不登校扱いになるんですね。

○荒井指導課長 そうです。30日以上欠席していれば数に入りますので、例えばチャレンジルームに行っているんだけれども、とびとびで休んで30日までいっちゃったよという子ももちろん数として入るし。

○委員 29日まで休んでいる子は入らないということ。

○荒井指導課長 そういうことです。

○委員 不登校だけでも。

○荒井指導課長 だから、そういう意味では、そのあたりがちょっと分かりにくいとお感じになる方のために、やはりチャレンジルームに登録しているこの数であるとか復帰率というんですかね。30日欠席しちゃったけれども、後に一定のペースで学校に来られるようになった子というのも中学校ではかなりいるんですね。今年の場合。なので、そこを数字としてお見せしない限り、そういった分かりにくさというのが出るんだなというふうに。

○委員 そのチャレンジルームを全く利用していない人ってどのぐらいかもちょっと知りたい。

○荒井指導課長 そうですね。復帰率出すと恐らくそこも明確になると思います。

○委員 そうですね。ありがとうございます。

○委員長 ありがとうございます。非常にいい議論させていただいてありがとうございます。

そういった意味でも、国のほうでも考え方というのはすごくいろんな議論があって、たまたま私がちょっと所属している学会なんかでも、日本の教育制度そのものもやっぱりある程度問い直さないとすごく難しいなという議論もあるんですね。やはり、じゃ、学校に来ることの出席だけをカウントしてよしとするのかという、そういう問題ではなくなっているという今の認識ですので、そういう不登校の子どもにどういうふうに寄り添うのかということもすごく大事な視点だというふうに思っています。

いい議論をして、また市のほうでも検討いただけるということですので、よろしくお願いしたいと思っております。

それから、私のほうから1点、せっかくの機会ですので短時間で結構なんですけれども、せっかく事務局で重大事態の資料を用意いただきましたですね。改めてこれ事務局も膨大な資料で中身の深い資料なので読み込みはすっといかないんです

けれども、用意いただいたので、ご専門の立場でこのところ大事なんだよとか、これを気にしてほしいんだという、ちょっとご指摘を教えてくださいませんか。大変無茶ぶりして申し訳ないんですけども、教えていただければと思います。

○委員 そうですね。第1回目でも少しお話をしたかと思うんですけども、今回かなりガイドラインのページ数が増えているというところがありまして、まず、今資料5で先ほどお配りいただいたもの、これがその概要ということになっているんですけども、全部で多分六十何ページとかそんなぐらいの資料になっているかと思えます。

もともとこのガイドラインが改訂された趣旨というのが、ここに記載してありますけれども、法律ができてから10年経過しているんですけども、なかなか対応がうまくいっていない例があるというようなところで、より細かく記載すべきだということで改訂されたというふうに理解をしております。

概要のまず左上といいますか、第2章のところ、重大事態の発生を防ぐための未然防止・平時からの備えを記載ということで、重大事態調査ガイドラインという、重大事態が発生したときの調査のガイドラインなんですけれども、その重大事態の発生を防ぎ、またそのようないじめによって何か大きな心身の被害を生じているとか不登校が生じたという場合に日頃からどう備えておくべきかというところが、まずこの第2章というところに書かれております。例えば、ふだんからいろいろな体制を整えておくべきだというような提言がここにされて、提言といいますか、ガイドラインが規定されているというところですよ。

あと、真ん中のところの第3章というところでは、学校がどういうふうに重大事態の調査に対応していくかということが記載してあるというところと、それから、第4章では、実際に児童生徒・保護者からの申立てがあったときに、どうやって学校は対応していくのか。やはり事実関係の確認であるとか、先ほどお話がありました初動対応というところについての重要性というのもここに記載がしてあるかと思えます。

それから、下の第6章から8章にいきますと、これは実際問題、重大事態が残念ながら生じてしまったというような場合に、どういうふうに調査をしていくかということが具体的に書いてあるわけですけども、重要なのは、調査をする側で、いや、これはいじめじゃないとか重大事態じゃないという決めつけをするのではなくて、まずしっかり調査をした上で、その件についてどういうふうな事実があったのかということと、それから、どういうふうに今後同じ事態が生じないようにするの

かということを検証すべきだというところが、細かく記載されているというところかと思えます。

先ほど、資料5のところをチェックリストをつけていただいていますけれども、これもガイドラインについているものかと思えます。こうしたチェックリストを使いながら、平時からの備えや重大事態調査を実施するという、そういう趣旨でチェックリストがつくられているのかなと思えます。

このガイドラインすごく長いので、読んでいてもちょっと若干疲れてくるところは正直あるんですけれども、ただ、やはり重要なことは書いてあるかなと思えますので、一度は目を通す必要があるのかなというふうに思っているところです。

すみません、ちょっとなかなかまとめるのは難しいんですけれども、そのような内容かと理解しております。

○委員長 ありがとうございます。

ご専門の立場から丁寧にご説明いただきました。助かりました。

私もなかなかふっと見ただけで分かりにくいところがあったものですから、教えていただいて助かりました。

それでは、ちょうど良い時間になったというか、時間が過ぎてしまった感じもするんですけれども、皆さんから今日、事務局の提案に基づいて、あるいは、また我々の専門的な立場でいろいろ議論させていただきました。

私自身はちょっと余計なこと言い過ぎたなと思って、ちょっと反省もしておりますけれども、皆さんのいい意見を参考にしながら、基本はやっぱり武蔵野市の子どもたちが心豊かに過ごすという、そのことがすごくいい風土に武蔵野市はありますので、その良さを生かして子どもたちの健全な成長を願うところです。

以上で審議を終わりたいと思えますけれども、事務局にお返ししたいと思います。ありがとうございます。

—了—